

## 「日中植林・植樹国際連帯事業」2018年度中国大学生訪日団第1陣 参加者の感想（抜粋）

### 第1分団（1・2号車）

○この訪日プログラムに参加しての感想は以下の二点にまとめられる。一つは日本人にとっての「物をとことんまで使い切る」という言葉が意味するもの、そしてもう一つは、日本の人々の健全で前向きな暮らしのあり方だ。

まず「物を使い切る」というのは、物の循環利用であり、製品の質の向上であり、物の利用率を高めることである。一つ一つの物を大切に、とことん使い込んでいくだけで、それは一層力を発揮し、役立ってくれる。例えば、先日見学した砂町水再生センターでは、各処理工程がとても丁寧であるばかりか、最後に残った活性汚泥までもが再加工され、道路の舗装用タイルになったり、炭化して燃料になったりしていた。森林資源の利用においても、森全体を見渡し、樹齢を適切に管理することで伐採量を抑制して、未来を見据えた森林運営により土砂の流失などを防止していた。これらもまた「物をとことん使い切る」ことの表れであろう。私も仲間の団員たちと一緒に植樹を行った。友好国である日本の役に立てただけでなく、祖国中国の発展を盛り上げていきたいという願いの種も自分の心の中に播くことができたように思う。

さて、もう一つの日本人の暮らしのあり方だが、これは世の中に対する価値観や人生観がとても健全で前向きだということである。例えば服装や旅行・外出について、日本人は用が足りればそれで充分だと考える。ひたすら物を消費することで満足感を得ようとするのではなく、もっと大切なのは、温泉に浸かりながら瞑想したり、緑の森を歩いたり、真摯に仕事に取り組むことで満たされたりといった、暮らしの細やかさであり、便利さであり、心の充足感なのだ。派手な上着は脱ぎ捨て、素朴な服を身にまとい、真っ青な空を見上げながらしっかりと大地を踏みしめる。この地のこうした精神文化を肌で感じることができて、今回の体験は私に実に多くの収穫と深い感慨をもらしてくれたように思う。

○①長野県庁での、林業専門技術員による長野県の森林育成に関するブリーフは大変勉強になった。お話から、植林や森林保護において長野県がいかに大きな努力を続けてきたかがうかがえた。周知のとおり、植林や森づくりは何世代にもわたって営々と維持していかなければならない長期事業である。こうした、人と自然がうまく共存し、持続可能な発展を図ろうとする理念こそ大いに学び奨励すべきだと感じた。

②環境や防災に関して、砂町水再生センターの見学はとても印象深く、心に残るものだった。説明を聞いた後、実際に現場の第一・第二沈殿池を見て回り、水再生センターの一連の処理工程について理解を深めるとともに、質疑応答時のやり取りから「活性汚泥処理法」についての疑問も解くことができた。

③青木村でのホームステイでは、私は同じ分団の仲間たちとMさん宅に泊まり、温かなおもてなしを受けた。お父さんは私たちに環境保全型農業について詳しく紹介し、早朝には田畑の散歩に誘ってくださった。野菜などの農作物栽培の技術や経験についてのお話は、大いに勉強になっただけでなく、とても美しい思い出として私の心に刻まれ、忘れられない一場面となった。

最後に、中日平和友好条約締結40周年という記念の年にこの交流プログラムに参加できたことを大変光栄に思う。これからも環境保全や防災減災などの分野で中日両国の協力が引き続き深まっていくこと、両国関係の安定した発展と永遠の友情を願ってやまない。

○植林に先立って行われた長野県のブリーフでは、担当官の方が日本人の森林に寄せる思いの深さとその保全について特に強調していた。中国でも環境保全型の発展という理念が語られるときには、生態系

への関心と人類が共有する生存環境の保護が強調される。しかしながら、その道のりの遠さ、森林保全の具体的取り組みが充分合理的で科学的なものなのか否か、生態系を守りながらの環境整備と経済発展のバランスをどう保っていくのか、森林資源の開発において、それらは果たして本当に循環利用されたり効率よく活用されたりしているのか、正直私はこれに否定的な見方を払拭できないでいる。これからもじっくり考え研究していかなければならない課題であろう。

また環境・防災に関する視察では、「転ばぬ先の杖、備えあれば憂いなし」という危機意識を一層思い知らされた。こうした強い危機感、おそらくある程度は日本の置かれた特別な環境によるものだろうが、一方で深い人道的配慮の表れではないかとも思った。十分な備えと災害に対する意識は、即座に目に見える効果や利益をもたらしてくれるものではない。だが予測不能な天災人災に巻き込まれたとき、これらはきっと被害を軽減し、迅速な復興の助けとなるはずである。「安きに居りて危うきを思う」と言うが、平時にあって危機に備えてこそ、更なる未来が望めるといふものだ。

日本での見聞や感想は到底ひとことで言い表せるものではない。しかし日本人の真摯で実直な生き方や仕事振りには感銘を覚えずにいられなかった。いかに人の長所に学び、自分の短所を補うか、それは口で言うだけではなく、どう実際の行動に移していくかにかかっている。

○今回日本を訪れ、これまでよく耳にしてきた街の清潔さや日本人の民度の高さを肌身で感じただけでなく、人々の防災意識や森林保全意識の強さにも触れることができた。中国では国民の防災意識はまだ不十分で、その多くが理論的な説明や部分的な訓練にとどまっているのに対し、日本での滞在中、私は日本の人々の災害発生に備えた強い警戒心を感じ取った。とりわけ、津村翔士先生のセミナーを聞いて、私は初めてスポーツが防災に関与できること、ひいては社会の課題をも解決できるものであることを知った。国民の防災減災意識を高め、隣近所とのつながりを深めていく手法は、中国も参考とし、見習うべき点であろう。

今回の訪日では砂町水再生センターも見学し、汚水がどのように処理されているのかを知った。そしてその後行く先々で私は周囲をよく観察することにし、川や流れのある所ではその水の透明度に注意してみた。驚いたことに、街なかであれ郊外であれ、澄み切った水は底が見えるほどだった。これは日本の人々の意識の高さと優れた教育の賜物だと思った。

植林活動に参加できたことも忘れられない出来事だ。自分にとって初めての、しかも日本での植林である。私の植えた苗木が日本の人々との友情の木となることを願っている。

そして、最も忘れがたいのは、青木村でのホームステイのことだ。この村で私は市井の人々の友情とぬくもりをしみじみと感じた。もう一度この美しい思い出の地を訪ねる機会を切に待ち望んでいる。

○今回の日本への短期交流訪問は私にとって稀有な体験だった。以前は日本といえば、ただの固有名詞に過ぎなかったのが、今では違う。この国は私に余りにもたくさんの素晴らしい思い出を残してくれた。清潔さ、礼儀正しさ、静けさ。それが日本の都市に対する第一印象だ。毎日のプログラムはぎっしり詰まっていたが、随行スタッフの方々のサポートの下、日々日本に対する印象が深まっていくのが感じられた。自分の手で木を植えたこと、ホームステイの楽しいひととき、長野の美しい風景、東京の眩しい夜景、水再生センターの処理工程など、どれもが心ふるえる体験だった。

とりわけホストファミリーと過ごした時間は忘れることができない。村の人たちの心配りと温かさには感動したし、日本の普通の人々の暮らしにも直接触れることができた。できればこれからもっと多くの人たちに日本でホームステイと文化体験を味わってほしいと思う。

大学訪問のプログラムもとても良かった。唯一残念だったのは、学生同士の交流がほとんどなかったことだ。訪日の時期が運悪くちょうど夏休み期間に当たっていたせいだろう。それでも日本体育大学で

は、親切な日本の学生たちが私たちを手招きしてくれ、ほんの短い間だったが少しでも話ができ本当に嬉しかった。彼女たちはちょうどそのときやっていたハンドボールについて紹介してくれたのだが、私たちが時間に追われていたこととおしゃべりがあまりに楽しかったせいで、持参していたお土産を渡しそびれてしまった。今でも心残りではない。

最後にもうひとつだけ付け加えたいのがごみの分別についてだ。日本では分別が本当に徹底されており、リサイクル率も極めて高い。私たちも真剣にこれに学ぶべきだ。中国の人口規模を考えるとなかなか難しいだろうことは予想がつく。それでもこれから徐々にやっていくしかない。頑張ろう！

○日本を参考にすべきだと思った点は以下の通りだ。

①環境保護は一人一人の責任：環境を守ろうという意識の醸成は赤ちゃんの頃から始め、幼稚園・小学校・中学・高校・大学とそれぞれの学習段階にある子どもたちに向け、授業の中で防災や環境保全教育を進めていくべき。

②体を鍛える：スポーツは国を強くすることにもつながる。子どもたちへの体育教育は、体を強く健やかにし、健康に対する意識を育む大切な手段である。上田女子短期大学付属幼稚園で、園児たちが小雨の中でも運動している様子は、北京体育大学で体育教師を目指す私たちにとって実に感動的な場面だった。安全や健康に関する教育を幼稚園時から始めるというのは、遠い将来の利益につながる。

③個人と集団：時と場合に応じ、それにふさわしい行動が大切だ。個人であれ集団であれ、それぞれに重要なポイントというものがある。個人のプライバシーの自由を尊重すると同時に、集団の利益の最大化も図らなければならない。

④節約：水不足は地球規模の課題である。日本の污水处理は、私たちが参考とし見習わなければならない点だと感じた。国がこうして水資源を重視しそれを守ろうとするからこそ、国民も真に水を大切に、節水と適切な使用を心がけるのである。

⑤ごみの分別：ごみの細かな分別は環境を良くする優れた取り組みであり、環境保全を学び、意識を高める重要な方策でもある。

上記五つの点が、私が訪日期間中に得た収穫であり、感想であり、そして我が国が参考とすべき点でもある。帰国後は、この旅を無駄にしないよう積極的に周りの友人らにこれらのことを伝え、推奨していきたいと思う。

## 第2分団（3・4号車）

○①私が最も感心したのは日本の衛生面だ。どの車もまるでたった今洗車したばかりのようにピカピカだった。

②日本の人々の日常の挨拶には温かさを感じた。いつも朝から気持ちがよかった。

③大学のキャンパスがとても良い雰囲気だった。とりわけ近畿大学の図書館はデザイン的にも優れ、ずっとそこに居たいような気分だった。

④道路交通に関して、何度となく「車が人に道を譲る」場面を目にした。私たちも見習うべきだ。

⑤常に相手のことを思って行動するという。人への思いやりは自分への思いやりでもある。

○この度私たち団員127名は8日間の中日友好訪問に参加した。心に残っているのは、細やかで優しく、まごころあふれるホストファミリーのことだ。素晴らしい思い出を私たちに与えてくれた。

ただの観光旅行とは違い、私たちは本当の意味で地元の日本人とふれあい、文化や風俗習慣を深く知ることができたと思っている。日本滞在中印象深かったのは、清潔な街並み、人に優しいデザイン、すべきことをきっちりやる人々のことである。ごみの分別やリユース・リサイクルの取り組みはとても良

い習慣であり、優れた方法だと感じた。ごみ処理時の問題を軽減するだけでなく、ごみが資源にも化ける。他人のことを慮るこうした考え方こそ、帰国してから自分の家族や小さな子どもたちに伝えていきたいと思う点だ。多くの「困った」を減らすだけでなく、快適な環境を作り出すことにもつながる。

最も深く心に残っているのは、滋賀県日野町でのホームステイのことだ。それは何にも増して貴重な機会だった。ホストファミリーのおじいさん・おばあさんがお世話してくれ、着物を着せてもらったり、伝統的なおいしいごはんを一緒に作ったりしたことは忘れられない思い出だ。ぬくもりと喜びを肌で感じた。言葉はすんなりとは通じなかったものの、私たちが披露した中国の伝統舞踊や民謡、歌などが、そんな言葉の問題など吹っ飛ばしてしまい、とても良い交流ができたと思う。

このように心に残る交流訪問に参加させていただいたことに感謝している。自分自身の本物の体験を周りの人たちに語っていきたい。

○①最も心に残ったのは、常に他人のことを思いやる日本人の親しみやすさと時間を守るという考え方だった。

②ごみを分別する際、可能な限り汚れを減らし、できるだけ再利用することを心がけていた。

③伝統文化の保存と継承において、一般市民であっても自ら進んで意識的に取り組み、なるべく元のままの形を残そうとしていた。

④東洋大学で交流した際、茶道や和菓子について学んだが、日本の若い人たちも意識して伝統文化を学ぼうとしているのがわかった。

○日本は自律意識や、相手の身になって物事を考えたり、相手を思いやったりする意識がとても強く、また細かな点も決してゆるがせにしない友好的な国だ。特に印象に残ったのは以下の点である。一つ目は、「社会課題を解決するスポーツの力・スポーツの可能性」というテーマで行われた防災に関するセミナーだ。ありったけの課題を見つけ、できるだけ楽しくおもしろい方法で、参加者を巻き込みながら解決へと導き、共助の力を高めていくという内容だった。二つ目はホームステイである。慈愛に満ちたおじいさんとおばあさんが、精一杯のおもてなしと心づくしのお世話をしてくださり、その上たくさんのかわいいプレゼントや心温まるひとときを私たちに与えてくれた。驚いたのは、お二人の暮らしぶりだった。前向きで楽しそうに、そしてきちんと節度をもって日々の生活の苦労や喜びに向き合っていて、今回も日だまりのような笑顔で、異国からやってきた見知らぬ人間をこうして受け入れてくれたのだ。おばあさんにはお子さんがいなかった。そこで私たちは、自分の祖父母に対するようにお二人を労わり気遣い、そして感謝した。おばあさんは私たちに「自分は子宝に恵まれなかったけれど、今日はこんなに可愛くてお利口な子どもが4人もできちゃったよ」と言ってくれた。

帰国後は、今回の大切で美しい体験を友だちや家族と分かち合い、私の日本への感謝と愛と一緒に感じ取ってもらいたいと思う。

○①セミナー「社会課題を解決するスポーツの力・スポーツの可能性」で、講師の津村先生は、集団スポーツを巧みに利用した、地域住民対象の防災教育の取り組みを紹介してくれた。人々に自助や共助について学んでもらうほか、住民同士の結びつきを強くする効果も期待できる。この手法は、中国の地域社会にも非常にふさわしいものではないかと思った。災害の危険性が高い地域の人的被害を抑えられるだけでなく、被災地域以外からも救助の手を差し伸べるよう促せるからである。

②スポーツ庁と内閣官房によるブリーフを受けた際、2020 東京オリンピック・パラリンピックに関する説明に対し、ある団員が交通面での課題や障がい者関連施設の問題について質問した。そのときの回答は、次回の冬季オリンピック開催を控える北京市にとっても大変参考となるものだった。

③東京都北区防災センターでの地震体験と煙体験は、災害に遭遇した際の恐怖を身をもって実感できるものだった。恐れで慌てふためく状況下にあえて人を置き、その状態で自分を守る方法を学ばせる。これは身につけるべきポイントをつかむ上で大変有効だと感じた。

④堺市クリーンセンター東工場での臭気を帯びた空気の利用や、ごみ焼却過程で生じる熱エネルギーの再利用は、中国が大いに学ぶべき点だと思った。聞くところによると、中国ではいまだに埋め立てによるごみ処理を行っている地域がほとんどだという。重度の土壌汚染を引き起こすばかりか、本来再利用可能な多くの資源を無駄にしている。また、日本のごみ分別方法は、中国での普及にも非常に適していると感じた。

⑤ホストファミリーの家で過ごした1日は、日本の田舎暮らしをどっぷり体験できた時間だった。田舎とはいえ、住宅設備などはかなり先進的なものだったし、おじいさんやおばあさんたちはお歳を召しているとはいえ、今も自分の趣味を持ち、とても充実した毎日を過ごしていた。現役を退いた後、ただ老人ホームで過ごすのではなく、好きな趣味を見つけ楽しむことができれば、中国のお年寄りが抱える「空の巣症候群」の問題解決にも効果があるのではないだろうか。

○防災やごみ処理についての学習プログラムを終え、環境にやさしい社会を見据えた日本人の意識の高さを感じた。視察を通じ、私も多くのことを学んだし、生活の上で実際自分がたくさんの思い違いをしていたことにも気づかされた。例えばある団員は、家庭用消火器を一見便利そうに思える台所に置いていたと言っていたが、これに対しスタッフの方はこう指摘してくださった。台所は最も火元となりやすい場所であり、実際火災が起きたとき消火器はすでに火の中、ということになりかねず、望ましくない、と。

その他、帰国後に私が伝えたい最大のことは日本のごみの分別についてである。以前より日本の街角の清潔さは耳にしていたが、今回そのことを体感した。日本では、ごみは各家庭で細かく分別され、ごみ処理施設との連携・協力体制のもと、便利さと清潔さが維持されている。ごみの分別など何も知らない私は、ごみを捨てるという極めて簡単なことでさえ、どうしてよいかわからず戸惑いを覚えた。学ばなければならないことはまだとても多い。

○日本は頻繁に災害に見舞われる国だ。だから地震やその他さまざまな自然災害に対する人々の意識はとても高い。今回東京都北区防災センターを見学する機会があった。こうした施設はどこも無料で開放されているとのことで、災害発生時の体験をするため地元の小中学生がたくさんやって来ていた。中国でも一部の小中学校の授業で災害発生時の身の守り方といった知識は教えられるものの、その効果は、日本のように楽しみながら学び、実際に自分で体験してみるのとは比べものにならない。確かに中国は日本ほど自然災害が多くないかもしれない。しかし国民の防災意識の欠如と防災能力の低さもまた事実である。帰国したら、自分の周りの人々に日本での体験と学んできた防災知識を伝えていきたい。